

中南米マガジン

6月20日号

CORREOS 40c MEXICO 88



Web!!

死と踊れ、死を超えろ
～メキシコ「死者の日」から
骸骨の聖母まで～



切手に見る
中南米諸国の
歴史



「ボデギータ」
下北沢に復活!!



切手に見る 中南米諸国の 歴史

文/シュッス



1

2



3

私は世界の切手収集が趣味です。とくに中南米の切手に特化したわけではないが、中南米諸国の切手も多数集めています。今回はそのコレクションをちよっとだけお見せしましょう。

まず、**図1**

メキシコの先古典期、オルメカ文明。オルメカ文明という名前は知らなくても、テキーラの銘柄のオルメカならご存知の方も多はず。そのオルメカの人の頭の絵ですね。先住民の文明というのはラテンアメリカ諸国共通の「誇りあるもの、尊いもの」という認識があるらしくて、それが感じられるのが**図2**。先住民文明とは縁のないキューバの切手ですが、**図3**はエクアドルのインガピルカ遺跡。

.80

1982 Año del General
VICENTE GUERRERO
BICENTENARIO DE SU NATALICIO



5

4



6

どんどんいきましよう。植民地時代。権力者はこんな格好をしています。 **☒3。**

ペドロ・デ・バルデイヴィアという人です。チリの征服者、コンキスタドールですね。

そして独立。独立の英雄は切手でも多数取り上げられています。たとえばこの方、ホセ・ミゲル・カレラです。 **☒4。** カレラはチリの独立の英雄で、のちに大統領になりました。

☒5 はビセンテ・グレーロ。メキシコ独立の英雄で、メキシコのグレーロ州は彼の名前にちなんでいます。

その後、メキシコは独立を達成。時は流れ1910年にはメキシコで革命がおきました。ビリヤ、サパタなどが活躍し、ディエゴ・リベラ、シケイロスなどの壁画運動が發展しました。 **☒6** はその壁画運動の1



8

JOSÉ VASCONCELOS
(Filósofo)

7

1882 1982

MÉXICO 1.60



10



9

人、ホセ・クレメンテ・オロスコです。☒7はホセ・バスコンセロス。1920年代のメキシコの文部大臣で、壁画運動など芸術を支援した人物です。

中南米といえばサッカー。☒8は1962年のサッカーワールドカップの記念切手。この大会はチリで開催されました。ブラジルのペレは途中で欠場しましたが、かわりにガリンシャが大活躍し、見事に優勝。ガリンシャは伝説の名選手になりました。1968年はメキシコでオリンピックも開催。☒9はその記念切手です。この大会は米国の黒人選手が人種差別に抗議したり、トラテロルコ事件（学生運動をメキシコ当局が弾圧し、死者が出た事件）がおきたりと、いろいろ考えさせられる大会でした。

切手に見る
中南米諸国の
歴史

12



14



11

NACIONALIZACION
DEL
COBRE
LEY Nº 17.450
1971



13



1970年。日本では万国博が開催されました。日本は平和でしたが、そのとき、はるか南米チリではアジェンデ氏が大統領になり、大きな変革がおこなわれようとしていました。☒10はその一つ。チリの農地改革というタイトルです。☒11は銅の国有化。☒12はガンジー。暴力反対というところでしようか……。当時のアジェンデ政権の政策がしのばれますが、結末はご存知の通り。

その後のチリの切手です。

1975年に発行されたもの。☒13は海軍がテーマ。図の人物はコクランという人で、彼はイギリス人ですがチリ海軍に雇われ大活躍、独立に貢献しました。☒14はその後彼の名前をつけた軍艦のコクラン号。というわけで、また会いましょう。

SALSA CUBAN SPOT Bodeguita 下北沢に復活!!

取材・撮影・文／増澤誠一

住所 ● 世田谷区代沢 5-6-14 前田ビル B1

電話 ● 03-5432-9785

営業時間 ● 平日 17:00 ~ 1:00 / 週末 17:00 ~ 深夜

定休日 ● 月曜日

E-mail ● shimokitabodeguita@mbr.nifty.com

H・P ● <http://bodeguita.web.fc2.com/index.html>



ダンサー、ボビーさん



ダンサー、ヤジさん

ボデギータを

2011年11月に

再オープンした

清野春香さんに

インタビューしました。

(2012年3月22日)



——今回、いろいろな方々からのラ
ブコールに応える形で、下北沢に出
店されましたが、その経緯から、お
話し下さい。

キューバンカフェを2011年4
月に閉じた後、ちょうど三軒茶屋(以
下、三茶)のスタジオ・ボデギータ
が移転することになり、その整理に
おわれていました。三茶のスタジオ
の移転が2011年夏頃に終わり、
それから、お店の候補を探し出しま
した。



——『中南米マガジン』24号で、「小規模なお店をやるうかという話は出ています。家族経営だけでできる、恵比寿のようなスペースがあればいいんですが、未だ構想の段階です。」と、今後の出店計画について、答えられていることですね。

スタジオのある三茶で探しましたが、不動産店の話では、「三茶では

不動産店を通さない取引が多く、物件が出て来ない。」ということ、物件があっても、居酒屋のチェーン店が出店するような大きなスペースか、カウンターだけの小さなスペースで、構想に合う適当なスペースの物件が見つからず、茶沢通り沿いに探して来たら、この場所に落ち着いて、そこがたまたま最寄駅が下北沢

だったんです。ここは三茶からも近く、茶沢通りに面しているの、車では5分位、徒歩でも20分位で便利です。

下北沢駅からはちよっと距離があるので、駅からちよっとぶらっと寄る。というわけにはいきませんが、イベントをされるとお客さんも集まり、ミュージシャンには好評です。店の雰囲気に加え、広さが、お客さ





んを把握できる広さで、ちょうど良
 いそうです。内装は、恵比寿の時の
 照明が、雑誌『ラティーナ』の地下
 の倉庫に保管してあったものを当時
 の内装店が活かしたことや、壁の絵
 画はキューバ大使館からマヌエル・

メンディベの作品をいただいたりし
 て、キューバの雰囲気作りを工夫し
 ています。
 — 以前からのお客さんには、下北
 沢での再オープンは知れ渡ったんで

しょうか？

恵比寿の時代のお客が、ボデギー
 タという名前を懐かしがって復活し
 て来てくれているのは、ありがたい
 ですね。今後は下北沢の地元の方々
 にお客になってもらおうと考えてい
 ます。下北沢は場所柄年齢層が高く、
 なかなかアプローチが難しいので
 が。近くに住まわれている30代で来
 てくださる方も現れるようになって
 います。小田急沿線の方々もみえる
 ようになっていくんですよ。11月に
 オープンして、5か月ほどですが、
 成功とってよいのではと、考えて
 います。

— 今回の出店にあたり、工夫され
 た点はどんなところでしょうか？

メニューでは、1品当たりのポ
 リュームをおさえて、こじんまりと

したイメージのものとなりました。そして、1品当たりの単価を少し値下げしたことです。つまみとなるものも多くしました。キューバ家庭料理の定番メニューの豆料理は当然ライオンナップしています。モヒートの種類を多くした(モヒートクラシコ(普通のモヒート)、フローズンモヒート、ダブルラムモヒート)ことも工夫の一つです。ボデギータは日本でモヒートを初めて出した店だと思えます。飲み物の種類もエスプレッソ&ラム(カラジージョ Carajillo)な



ど、増やしました。

——居酒屋か、どこかで、モヒートを飲みましたが、ひどい味でしたね。では、本場のモヒートを飲める店ということをし、売りにしましょう。

——音楽等のライブはどうでしょう？ 週2〜3回は入っていますでしょうか？



週に水曜日、金曜日、日曜日の3

回は確実にライブが入り、多い時は木曜日も入ることがあります。恵比寿の時代にキューバ音楽を始めた、ミュージシャン、例えば、末永さん、板前(佐々木 誠)さんはもちろん、六本木の時代から始めた、毛利さんなど、多くのミュージシャンが協力してくれています。早くに、ボデギータから音楽活動を始めた人々はお店



左/ディーバ・ノリコさん 右/末永雄三さん



が29年続いていきますので、60歳に手が届く方々だろうと思います。若い人々は20代ですから、年齢層は幅広く、1つのバンドでも、50代から20代とメンバーが幅広く、世代が続いていることが特徴でしょう。キューバでも世代交代して幅広い年齢層のバンドがあります。キューバのそういう文化が影響しているのでは。

——それは、お店の歴史と共に、キューバ音楽で活動を始めた方々

が、ずっと音楽活動を続けているということでしょう。キューバ人やキューバについてはいかがでしょうか？

キューバ人は基本的に変わっていないと感じています。貧しい国なのに誇りを持って生きています。日本人は見習わないといけないと考えています。悲観的に考えず、明るく生きていきますね。キューバでは日本のような自殺ということはないのでは。日本人女性と結婚して日本に住むキューバ人男性の割合が高いと思います。キューバ人のコミュニティができるのではないのでしょうか。

——キューバへは、最近ではいつ頃行かれましたか？

20年前位に行っただけ、最近は何も行っていないです。

——1995年の渋谷のムウチャーチャ（マルハ^株が運営していた。今はない。『中南米マガジン』13号に掲載）の時から、日本とキューバの交流の歴史が変わってきて、あれから日本人女性と結婚して日本に住む人々が出てきたんですね。

ペドロ・バジェさん、ルイス・バジェさん兄弟のことですね。二人は、素晴らしい活躍をしています。ルイス・バジェさんは、氷川きよしのバックバンドで昨年末の紅白にも出たし、ブームの宮沢和史や矢沢永吉のバンド、演歌歌手のバックバンド等に参加しています。ペドロ・バジェさんはルンバ・コン・クバーノス等や日本キューバ友好協会のスペイン語・パーカッション両教室の講師をし、『リアル・キューバ音楽』

キューバ人が教える人生の楽しみ方
』(ヤマハミュージックメディア、
2009年刊)を出版し、活躍して
います。

——二人とも、スゴイ努力をしてい
ます。日本語で仕事をとれるよう
に日本語を学んでいました。『中南
米マガジン』の読者に訴えたいこと
は？

ポデギターが再オープンしたこ
とを広めてほしい。キューバの文
化・音楽の素晴らしさを知ってほし
い。このお店から広めていきたい。
キューバのレストランでは、専属の
バンドが音楽を演奏しています。そ
ういうイメージでやりたいですね。

——お店が成功するよう、『中南米
マガジン』も応援しようと思います。

たまたま来店されたお客さん
に即席インタビューしました。



シモキタでお店の近くに住んでいる
丹下さん。(サルサをしていました
が、今はアルゼンチンタンゴをして
いるそうです。)(写真、左側)

「毎週来ています。今日で5、6回
目です。気に入っています。二人で
スペインに行き、スペイン語圏、ラ
テンの世界に親しみをもっていま
す。ラテン音楽を聴き出すと、日本
の曲は聴かなくなりですね。今度は
キューバに行きたいです。」

お友だちの野原さんは、誘われて初
めて来店したそうです。(写真、右側)

本日のライブ

(2012.2.22)

Nueva Luna @ 音ね

ギター…浅見出さん

ヴォーカル…毛利ミホさん

パーカッション…上原裕子さん





死と踊れ、
死を超えろ

メキシコ

「死者の日」から
骸骨の聖母まで

文／土方美雄

「死者の日」にみる
死と生Ⅱ再生

『中南米マガジン』VOL.24には、
ニューヨーク州立大学オーバニー校
に在籍される、中米言語の研究者で
ある松川孝祐と、オアハカ在住の現
代アーティストである杉浦暖子によ
る、「オアハカの死者の日」と題し
た、詳細なレポートが掲載されてい
て、大変、興味深く、読んだ。

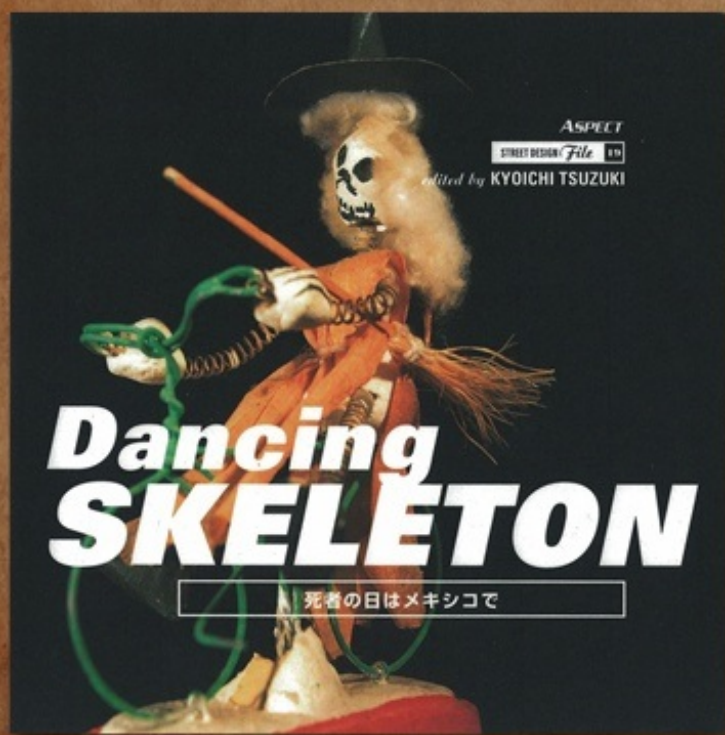
「死者の日（ディア・デ・ロス・
ムエルテス）」は、死者の魂が家族
や友人等のもとに戻ってくるのを、
墓前や家に設けられた祭壇を、花や
ロウソク、骸骨の形をした飾り物、
パンやお菓子（砂糖で出来た頭蓋骨
等）で飾り立てて、迎え入れるメキ
シコ古来の祭祀で、スペイン人による

征服以前は、毎年、夏に行われていたようだが、征服後はカトリックの教義によって改変され、十一月一日の「諸聖徒日」をメインに、その後、行われるようになったという。

ところで、その十一月一日の前日である一〇月三十一日は、メキシコはもとより、世界的に広く知られている、欧州発の、死者と悪鬼夜行の大イベント「ハロウィン」であり、そのハロウィンと「死者の日」との混在・融合・一体化もまた、年々、進行しているようである。先の松川・杉浦レポートにも、このことに関し、「10月31日といえばハロウィンだが、オアハカではハロウィンなのか死者の日なのか区別がいまいちつかない」との、表記がある。

私自身は、残念ながら、ただの一度も、メキシコで「死者の日」の祭りに遭遇したことがないのだが、「死者の日」のイベントには以前から、並々ならぬ関心を、抱き続けてきた。というのも、元々は「死者の日」用としてつくられたものであろう、日本でも「チャイハネ」「チチカカ」等、中南米の民芸品を扱う店には必ず置かれていて、結構な人気アイテムにもなっている、素朴な白塗りの骸骨人形に、魅せられ、夢中になってしまった、そのひとりであったからである。

現代アートやアウトサイダーアート等に造詣の深い、編集者の都築響一もまた、おそらく、そうしたひとりであり、二〇〇一年にアスペクトから、『Dancing SKELETON ~死者の日はメキシコで~』という、コレクションを集めた写真集を、出



『Dancing SKELETON ~死者の日はメキシコで~』
2001年 (アスペクト)

されている。その本文と写真の一部を担当された、ビリー・シャイアという人は、同書で、次のように書いている。

「死者の日の本質とは、生者と死者とのつどいにあると思われる。

家々に祭壇が設けられ、あの世に先立った友人や親族たちが、一年にいちどこの世に還ってこられるよう供え物を飾ったり、祈りを捧げる。死者たちの墓を掃除し、花や蠟燭で飾り立て、そうして飲んだり祝ったりする家族たちで、墓地は夜遅くまで賑わう。(中略) 死者の日はメキシコ各地でそれぞれ独自の発展を遂げ、また移民の流入に従ってアメリカ合衆国にも広がってきたが、その本質はかわることがない。死者の日とはなによりもまず、生を謳歌する

祝祭であり、死を悼む日ではないのである」

確かに、死者(骸骨人形)たちは、とても、陽気だ。大口を開けて、笑ったり、のんびりとバスタブにつかったり、タバコを吸ったり、着飾って、気取ってポーズを決めたり、している。そこに、たとえ、人生の儚さを感じることにはあつたとしても、絶望はない。あの世もまたいいものさと、あたかも、死後の「生」を謳歌しているかのようである。

だから、一見、グロテスクにも、おどろおどろしく見えても、骸骨人形は恐怖の対象ではなく、そこには、誰であれ、所詮、いつかは死ぬ身の人間の、度し難い空威張りぶり、それでも、生に執着する滑稽さをすら、

垣間見ることが出来て、ダメな奴だなあ……と、つくづく、何だか、我と我が身を省みるようで、微笑ましくもあるのである。

ところで、ノーベル文学賞受賞作家の大江健三郎は、「剥きだしの死」と二重性 メキシコでの経験から(『新潮古代美術館／古代アメリカの遺産』新潮社)の中で、メキシコの詩人、オクタビオ・パスの著作(『孤独の迷宮』)を引用しつつ、次のように書いている。

「メキシコ人の性格のもっともあきらかな特質のひとつは、恐怖のもののきを観照することをかれらが進んでやるという点にある、とパスはいう。かれらはそれのあつかい方に慣れており満足しているようですら

ある。村の教会の血まみれキリスト像、新聞の見出しのブラック・ユー

モアや、通夜や、『死者の日』の頭蓋骨のかたちをしたケーキヤキャンデイを食べる習慣は、インディオやスペイン人たちから受けついだ慣習だが、いまやわれわれの存在の分割不可能な一部である。われわれの死への礼讃は、また生への礼讃なのだ、愛が生への飢えであり死への渴望であるのと同じ仕方だ。(中略) メキシコ人は死に慣れたしんでおり、死について冗談をいい、それを愛撫し、一緒に寝、それを祝う。それはメキシコ人の好きな玩具であり、そのもつとも堅実な愛人なのである。事実、おそらくはメキシコ人も他国人と同様に、その態度のうちに恐れを示すだろう。しかしすくなくとも死はよそに隠されてしまっただけいな

い。メキシコ人は死を正面から見る」

死と生は、まさに背中合わせの存在であり、死は決して、それ自体で完結するものではなく、それを通して、再生Ⅱ生につながっているのだという考え方が、一体、いつごろからメキシコの人々の間に定着したのか、私にもわからないが、少なくとも、そうした考え方は、スペイン人がやって来る以前の、先住民の文化の中にも、すでに存在していたものである。大江は、いう。「古代アステック(アステカ)人にとって大切なことは創造の連続性を保障することであった。いけにえは彼岸での救いをもたらすものではなく、宇宙的な健康のためのものであった。個人ではなく世界が、人間の血と死によって生命をあたえられたのである」。

スペイン人による侵略と支配、そして、キリスト教文化の、有無をいわせぬ浸透によっても、それは脈々と生き続け、あるいは、形を変えて、キリスト教文化の中に定着した。そうした風土が、メキシコにはあるのである。「死者の日」と骸骨人形は、間違いなく、そのひとつの象徴であるといえる。

大江健三郎は、先の文章の中で、続けて、メキシコ・シティーに滞在する中で、「メキシコの古代の遺跡とそこからの出土品をおさめた博物館へ向けて、それもメキシコ古代人が生きた場所としてのその場合へというかたちでみちびかれ」、ずっと、「つねに死と再生の課題を考えつづけていた」という。

であった。

そして、「僕がしだいに眼を開かれることになった現地の造形芸術は、古代の遺跡におけるそれであれ、もっと周縁的な存在としての現代に生きつづけているインディオの民芸品としてのそれであれ、つねに死をくつきりと表現しているように思われたし、しかもそれにかさねて微光をはなつ暈のように、「再生のヒントを呈示しているように思われたのであった」。

私は、生憎、大江ほどの慧眼ではないため、死の中に再生への微光をなど、感じとることは、正直、あまり

りなかったが、それでも、メキシコに通い始めて、その風土が放つ陽気な死の匂いに、たちまち惹きつけられてしまった、間違いない、ひとり

日本にいと、（少なくとも、ωニ以前は）あまり身近に感じることの出来ない存在である「死」が、メキシコでは、常に、非常に身近にある、そう感じられるのである。

様々な死II 骸骨の眷属たち

「死者の日」の、いわば主役である骸骨（人形）たちは、実に様々な形で、メキシコ人々の日常の中に、出没している。

大昔に観た、ロシアの映画監督、セルゲイ・エイゼンシュテインの『メキシコ万歳！』という映画でも、観たのがあまりにも大昔すぎて、もう

ほとんど断片的にしか、記憶が残っていないのだが、一番、強くその印象に残っているのは、骸骨人形がねり歩く「死者の日」のパレードの光景である。

この映画の構想等に関しては、エイゼンシュテインの『メキシコ万歳！ 未完の映画のシンフォニー』（現代企画室）という本に詳しく、記述されているが、「死者の日」のシーンは、エイゼンシュテインによって、映画のエピローグ用として、撮影されたものであったようだ。映画はエイゼンシュテイン自身によってではなく、その遺志を受け継いだ助監督のグレゴリー・アレキサンドロフによって、実に長い年月を経た一九七九年に、完成・公開されている。



JOSE GUADALUPE POSADA

『メキシコ万歳!』は、古代メソ

アメリカの遺跡を映し出すプロローグで始まり、4つのパートからなる本編を経て、「死者の日」の祭祀を描いたエピソードで、終わる。古代人の築いた伝統や文化が、今日のメキシコにも、脈々として受け継がれていることを、エイゼンシュタインはきつと、そこで描きたかったのだろう。「死者の日」と骸骨人形は、

その象徴として、ふさわしいものであったのだ。

ホセ・グアダルルーペ・ポサダは、メキシコの現代美術に大きな影響を与えたとされる、版画家にして、挿絵画家である。彼もまた、おびただしい数の骸骨の挿絵を描いている。私がその作品を、五〇点近くまとめ観たのは、二〇〇九年に世田谷美術館で開催された「メキシコ二〇世

「ホセ・グアダルルーペ・ポサダ展 骸骨の舞踏」名古屋市立美術館所蔵

紀絵画展」に併設される形で開催された特別展示「名古屋市立美術館所蔵品による

ホセ・グアダルルーペ・ポサダ」によって、である。同展では残念ながら、特別展示の図録は発行されなかったが、伊丹市立美術館で一九九八年に開催された、名古屋市立美術館所蔵品による「ホセ・グアダルルーペ・ポサダ展 骸骨の舞踏」という展示会の図録が、幸い、残っている。

その数万点とも二万点ともいわれる、ポサダの膨大な版画や挿絵は、政治や宗教、災害等々を描いたものなど、内容的にも、実に多岐におよぶが、何ととっても、ポサダといえれば、骸骨画である。様々な事象の前で、骸骨たちは文字通り、哄笑する。ポサダは、その絵の多くに、自ら、コメントを付している。

「そこには芸術家と職人の骸骨が

葬られている／
この無類の煉
獄における芸術
家たちの姿を見
よ／それは人生
の始まりから悲
惨な最期までを
明らかにする／
『今日はあなた
で、明日は私』

「イギリス人の骸骨、イタリア人
の骸骨／フランス人の骸骨、マキシ
ミリアーノの骸骨／ローマ法王、枢
機卿、国王、公爵、側近そしてメキ
シコ首相も／墓の中ではみな同じ骸
骨の山」

この世のすべてのものに向けられ
た、ポサダの機知と冷笑、ありとあ



『骸骨の聖母サンタ・ムエルテ 現代メキシ
コのスピリチュアル・アート』（新評論）

らゆる権威を笑い飛ばす風刺画の
数々。メキシコの現代美術を代表す
る、三大壁画家のひとり、ディエ
ゴ・リベラはポサダについて、最大
級の敬愛の念を込めつつ、次のよう
に語っている。

「ポサダの名前は偉大であるがゆ
えに、おそらくいつの日にか忘れ去
られるだろう！メキシコ民衆の魂と

結合するがゆえに、ポサダという個
人は完全に消え去ってしまうことに
なるだろう」

最後に、現代のメキシコにおい
て、格差社会の主に底辺部で、人々
の間に、確実に拡がっているという
骸骨の聖母（サンタ・ムエルテ）に
対する信仰に関しては、中南米美術
に関する日本における第一人者であ
る、神奈川大学教授の加藤薫が、『ラ
テンアメリカの民衆文化』（行路社）
に収録された論文「癒しの死神を視
る サンタ・ムエルテの図像学序説」
で、おそらく初めて紹介し、私もま
た、大変、関心を持った。加藤はそ
の後も、現地調査を続け、その成果
を最近、『骸骨の聖母サンタ・ムエ
ルテ 現代メキシコのスピリチュア
ル・アート』（新評論）という本に

まとめられた。

その内容に関し、ここで詳しく紹介することは避けたいが、全身骸骨で、フード付きの丈の長い胴着を身に纏い、時には大鎌さえ持った、この一見恐ろしい死の神が、メキシコの一部の民衆によって、悪から身を守る聖母として、文字通り、熱烈に信仰されていることは、非常に、興味深い。その原点を、「死者の日」同様、先住民文化にまで遡って、言及したくなる欲求に駆られるが、これは他日を期したい。

また、加藤も前著の中で言及しているが、骸骨の聖母と、一五〇一六世紀に、ヨーロッパ全土で盛んに描かれた「死の舞踏」との関連もまた、考察すべき事項の、ひとつである。

「死の舞踏」に関しては、私は國學院大学教授の小池寿子の『「死の舞踏」への旅 踊る骸骨たちをたずねて』（中央公論新社）という、二〇一〇年に出た本をたった一冊、読んだだけなので、まだ何ともいえないが、それがスペイン人のもたらしたキリスト教文化を通じて、メキシコにも流入した可能性もまた、当然、議論されるべきであろうと思う。

「オアハカの死者の日」というレポートを出发点として、あれこれ、考えたことを、まとまりな

く、書きつづつてみた。もとより、完成稿ではない。いつの日にか、完成稿としてまとめられることを、願っている。

「死と踊れ、死を超える」
骸骨人形が、私の頭の中で、大口を開けて、そう哄笑している。



『「死の舞踏」への旅 踊る骸骨たちをたずねて』
(中央公論新社)

編集後記

最近、母が入院し、病気をし
て入院するっていうのは金がか
かるんだなあということと思い
知らされた。元気だった母がだ
んだん病気がちになり、医者通
いするようになり、いい治療を
してもらいたいと思うのだが、
それにはお金が必要。

今、被災されている方々はど
うなんだろう？ 納得のいく医
療が受けられているのだろうか？

すべてに金がものをいうこの
日本で……。と思ったこの
頃だった。(金安)

中南米マガジン

2012年6月20日

【編集・発行人】金安顕一

【住所】埼玉県ふじみ野市大原 1-13-19

【tel./fax.】049-261-5993

【デザイン】吉永昌生

郵政職場における様々な トラブル・労働相談に対応します。

- ①いじめ・パワハラ問題。②賃金不払い・サービス残業問題。③労災・メンタルヘルス問題。
- ④非正規・期間雇用社員の均等待遇・格差是正問題。⑤組合作り・ピラ作り。
- ⑥その他様々な労働基準法に関する問題等々。

郵政ユニオン船橋支部

postulonfunabasi@yahoo.co.jp / 090-3478-5679



中南米マガジンが送る
ラテンアメリカをテーマに
起業するには？

職業は
ラテン
アメリカ

編 中南米
マガジン

ラテン系ビジネスで明るく暮らす、20人のケセラセラ

私の仕事はラテンです。

先の見えない今こそ
中南米で生き抜く！

音楽・映画・ファッション・
インテリア・飲食・旅行……。

ラテンアメリカをテーマに
起業するには
どうしたらいいかを
ゆる〜く、まじめに考えよう。

中南米マガジン

ラテンアメリカをテーマに起業した人にインタビューし、
ラテンアメリカで起業するためにはどうすればいいかを共に考える本
「職業はラテンアメリカ」
現在、鋭意製作中！ 表紙はもうできました！ かなりいい本です。
もう少々お待ちください。もうちょっとで完成、出版できます！